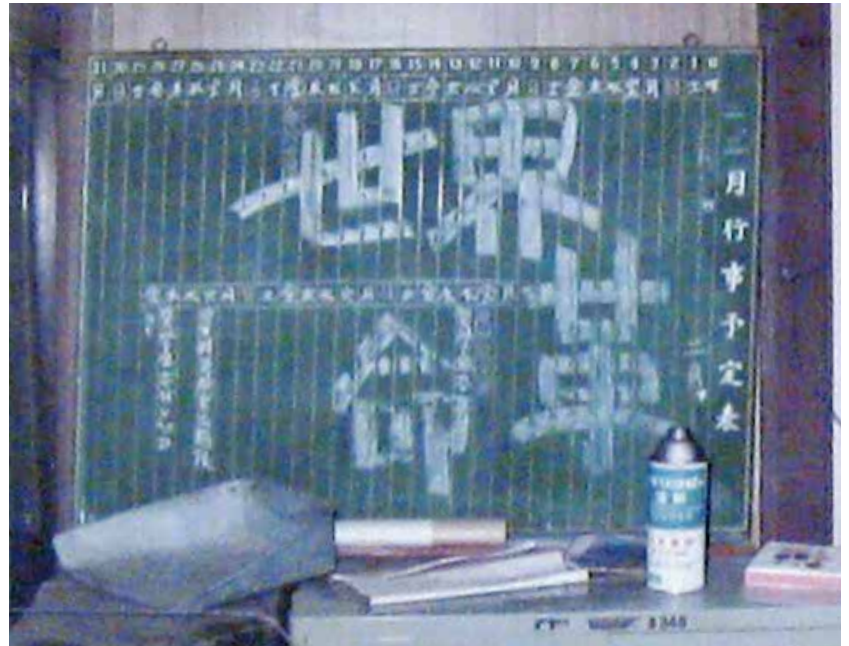


# き 紀 の 之 み 水 な 門 と



和歌山大学経済学部旧蔵写真真類(2020年度に本研究所へ移管。全69点)のうち「70年安保関係写真アルバム」より。いずれも撮影者不明(和歌山大学経済学部事務職員か)。和歌山大学経済学部(高松地区)にて撮影。「封鎖宣言」は1969年7月撮影。「世界革命」は1969年2月～12月に撮影。いずれも発色現像方式印画。89×127mm。

## 資料紹介 「封鎖宣言」「世界革命(落書き)」

1968年は世界的に学生運動が高まりを見せた時期であった。東京大学の安田講堂を主とする建物を封鎖していた学生に対して機動隊が突入したのも、この年である。1969年には、全国的な学生運動の高まりに応じて、和歌山大学の一部の学生が、学舎移転問題を契機に経済学部の建物を封鎖した。「封鎖宣言」には1969年7月12日付で、「このような帝国主義者の攻撃には我々はより直接的実力的斗争でもって答える。抑圧され阻害され支配されてある階級その鉄鎖を打ち破るためのものであるなら如何なる形態の斗争も我々はこれを支配し共に闘うであろう」と書かれている。

連合赤軍の暴力的事件などを背景に、70年代に入ると学生運動の勢いは衰えた。しかし学術的には、1968年を境に人間や自然環境を含む様々な分野に新しい考え方が登場したという主張がある。これが「1968年革命」論である。現在もなお、こうした考え方の力が失われていないことを考えれば、70年安保闘争は、現在の私たちの思想や行動に間接的に影響を与えており、単にひとつの運動である以上に、重要な研究対象となろう。

先述の「封鎖宣言」からもわかるように、運動のなかで発せられた言葉は、それがどのような状況・文脈において、誰に・どこに向かって発せられたのかをふまえずには理解できないものである。そこで本研究所では、1960年代を中心とした学生運動の担い手たちの声を収集する活動を進めている。具体的には、学生運動を始めるにあたっての動機や問題意識、幼少期から青年期に至る政治的志向性が獲得されていく過程、学生運動のなかで形成され共有されていた文化についてのインタビュー調査を実施している。この活動は、文書資料には必ずしも記録されていない歴史と文化を発掘・保存して次世代へと継承する、オーラリティに着目した歴史・文化研究として位置づけることができる。

(長廣利崇／経済史学、西倉実季／社会学)

## それぞれの紀温泉—有間・間人・斉明—

菊川恵三／日本古代文学(教育学部教授、紀州研所長)

日本古代文学を学んでいると、時々ハッと驚かされることがあります。斉明女帝の紀温泉(白浜温泉)の旅もその一つです。

時は、斉明天皇の4年(658)、大化の改新に始まる政治動乱が、女帝の息子・中大兄を中心に次第に落ち着きをみせてきた時代です。もともと3年後には、新政权をあげた百濟救済の出兵とその失敗のなかで、斉明天皇(68歳)は九州に没するのですから、この白浜旅行は最後の一家団欒の旅だったのです。この旅に関係した歌が、万葉集に2か所、日本書紀に1か所見ることができるのですが、驚いたことに三つは全く違っているのです。

最初は巻2「挽歌」に収められた有名な有間皇子の歌です。

有間皇子、自ら<sup>いた</sup>傷みて松が枝を結ぶ歌二首  
<sup>いわしる</sup>岩代の浜松が枝を引き結び<sup>さき</sup>ま幸くあらばまたかへり  
 みむ(2・141)

この歌の背景に「有間皇子の変」があり、海南の藤代坂で殺されたのは、あまりに有名です。この歌は、謀反を密告され、最高権力者中大兄の尋問を受けるため、白浜まで護送された時の歌とされています。岩代は白浜の手前、田辺湾をはさんで向き合った海岸に、今も岩代王子があるところ。どうやらその松の枝を結んで、旅の安全を祈ったようです。しかし、この歌は「もし、無事であるならば」と仮定形でうたっていて、決して無事ではすまないことを暗示しています。旅の歌でありながら、「挽歌」に収められているのもそのせいでしょう。

次に有間皇子の歌とは対照的なのは、巻2「雑歌」の歌です。

<sup>なかつすめらみこと</sup>中皇命紀温泉の歌

君が代も我が代も知るや岩代の岡の草根をいざ結びてな(1・10)  
 我が背子は<sup>かりほ</sup>仮廬作らず草なくは小松が下の草を刈らさね(1・11)

中皇命はだれを指すのかについて議論のあるところですが、今は通説に従って、斉明天皇の娘、中大兄や大海人皇子の妹、間人皇女とみておきましょう。どうやらこの旅は、斉明ファミリー総出の旅だったようで、この歌はそのスナップ写真だといえます。

ここには、仲の良い家族にある「甘え」があるように感じます。同じ岩代で草を結ぶのですが、「さあみんな一緒に」と呼び掛けます。仮屋の屋根をふくなら「ほれ、こちらの草を刈りなさい」と「我が背子」に呼び掛けます。背子は誰なのか不明ですが、南紀の陽光の下、母と娘・息子たちの笑顔が浮かびませんか。

最後に、日本書紀に収められた老女帝・斉明の歌をみてみましょう。

冬十月…、紀温泉にいでます。<sup>たけるおう</sup>皇孫建王をおもほしいで、悼み悲しびたまふ。すなわち口号して曰く  
 山越えて 海渡るとも おもしろき <sup>いまき</sup>今城のうちは  
 忘れゆましじ  
<sup>みなと</sup>水門の <sup>うしほ</sup>潮のくんだり 海くんだり 後も暗れに 置きてか行かむ

うつくしき 吾が若き子を 置きてか行かむ

建王は中大兄の息子。障害があり口がきけず、この年にわずか8歳で夭逝しました。祖母の斉明はこの薄幸の孫を可愛がっていたのでしょう。楽しい白浜への道中も、この子を思い出しては、その墓所(今城)を慕い、海を渡れば心は後ろへ後ろへと引かれるのです。

三者三様とはまさにこのことです。そして大切なことは、いずれの歌も天皇や皇子という役割を離れ、個の思いが刻まれていることです。古代日本にようやく姿を現し始めた定型の歌=和歌は、このようなそれぞれの思いを表現することから始まったのです。

今年で退職を迎えますが、大学から遠望する古代文学ゆかりの地・和歌山を思い出しつつ、これからも進んでいきたいと思っています。



和大から望む海南藤代坂

## 『道成寺縁起』書名一覽書

大橋直義／中世日本文学・文献学(和歌山大学教育学部)

道成寺蔵『道成寺縁起』二巻二軸ほど、よく知られる書物でありながら、その名称に混乱のあるものは無い。

私見ではおよそ三つの階層に分節しうる課題がある。第一に、国指定重要文化財としての名称を「紙本著色道成寺縁起」二巻とするこの書物そのものについて、道成寺とその周辺においてどのように呼称してきたのかという観点である。本書には内題・尾題は見られず、(江戸前期)後補表紙に「道成寺縁起上(下)」と本文とは異なる手で墨書した外題が貼題簽にて示される。この表紙は、江戸時代中期に行なわれた開帳での口上に抛れば、徳川頼宣が寄進した蜀江錦の布表紙であるとされ、「後小松院宸筆」とする点、足利義昭が天正元年[1573]十二月に由良興国寺で披見したとする点とあわせ、見どころの一つとされている。本文とは別筆で記される義昭披見に関する識語にも書名は見られず、「此縁起」あるいは「日本無双之縁起」との賛辞が見られるのみである。幕末・明治の朝岡興禎『古画備考』および黒川春村・真頼『考古画譜』では本書を「道成寺縁起」と称する。同時代、『紀伊続風土記』が「絵縁起二巻」、その編纂に参画した小原良直の『典籍年表』が「紀伊国日高郡道成寺絵巻物 二軸」とすることに比べれば、『考古画譜』『古画備考』が実物の題簽・外題から得られる情報に即して記載していることがうかがえる。

ところが当の道成寺においても、江戸時代以後、その呼称に揺れがあった。院主真海が天和元年[1681]諸国巡見使を接遇した際の口上では、本書を単に「御縁起」と呼ぶのみ。一方、盛海代、宝永七年[1710]の接遇口上では「鐘巻由来之縁起」と呼称されるようになり、次の盛寛代でも同様であった。この「鐘巻由来之縁起」なる呼称は、享保四年[1719]に和歌山城下栗林明王院で行なわれた出開帳でも、出陳品一覧を示す際に用いられている。なお、開帳興行における口上では「勅筆之御縁起」と呼ばれていた(道成寺内に伝存する口上控としては宝暦十一年[1761]のものが最古。同年三月三日から二十日間の予定で寺内居開帳が行なわれた)。ただし先にも言及したように、これは足利義昭花押・識語、徳川頼宣寄進表紙と合わせて後小松院宸筆であるという「見どころ」に言い及ぶための呼称で、本書の書名とまでは言えない。さらに文政二年[1819]の名古屋阿弥陀寺の出開帳では「安珍清姫縁起 式巻」という呼称も見られるようになる。

第二の階層として、所謂「日高川草紙絵」と分類される酒井家旧蔵本・根津美術館本との対比や、『道成寺縁起』そのものの以外の伝本を含む全体をいかなる名称で呼ぶか、という



問題がある。前者について言えば、『古画備考』が「道成寺絵詞」として掲出する土佐廣周画の一本は奥書からして酒井家旧蔵本の転写本であろうし、その酒井家旧蔵本の加証識語には「右道成寺之絵一卷者…」と見え、道成寺という寺名すら登場しない本文を持つ同本までも「道成寺之絵」としてしまうのである。

さらに第三の階層として、1968年に角川書店から刊行された『日本絵巻物全集』が『道成寺縁起』を指して「道成寺縁起絵巻」と誤記したことに起因する問題がある。1982年刊『続日本絵巻大成』が「道成寺縁起」と正確に示したにも関わらず、『全集』および五来重『絵巻物と民俗』(角川選書、1981)の影響力のためか、現在でも、本書を指して「絵巻」を含む七文字で記す例が後を絶たない。これまでに見てきたように、本書をこの七文字で呼ぶ事例は少なくとも前近代には見られず、固有名詞としては『道成寺縁起』と正確に記述することが重要である。

しかしそのことばかりでは現状の混乱は収まらない。『道成寺縁起』を含む書物群についての術語が必要だからだ。あくまでも一案だが、道成寺の鐘にまつわる安珍清姫の物語については「鐘巻由来」としてはどうだろうか。「日高川草紙絵」の対概念である。その他、道成寺という場に関わるものとしては創建縁起や在地系の「鐘巻由来」もある。また、歴史的に見れば「日高川草紙絵」も道成寺に関連付けられてきた経緯もある。つまり、『道成寺縁起』にわずかでも関わりうる書物については全てを「道成寺絵詞」と概括してみてもどうか。この術語が果たして浸透するかどうかは分からない。しかし、「道成寺縁起絵巻」という語は固有名詞としても集合名詞としても使わない姿勢こそが、より正確に「道成寺絵詞」(と芸能「道成寺物」)を把握するための一歩となることは間違いなくである。

## 変容する祭礼と芸能者の交渉史

吉村旭輝／芸能史(和歌山大学 紀州経済史文化史研究所)

2009年、本タイトルを副題とした論文を執筆した。(吉村旭輝[2009]「日光東照宮御神忌祭と田楽法師—変容する祭礼と芸能者の交渉史—」日次記事研究会編『年中行事論叢—『日次記事』からの出発—』、岩田書院所収。)芸能史研究での大きな主題のひとつである芸能者とそのパトロンとの関係については、これまでも猿楽における世阿弥と室町幕府の関係、また歌舞伎における新勝寺と市川家の関係等、いわゆる「伝統芸能」の研究で多々みられる。それらはそれぞれの芸能がもっとも花開き、歴史的事象と重なり合う時代の研究が多数を占めている。私が執筆した上記論文でとりあげた芸能は中世を代表する芸能である田楽躍りである。この芸能は平安時代末期から南北朝時代に藤原氏等貴族や武家の庇護のもと、もっとも隆盛を極めた芸能のひとつである。しかし、私がとりあげた時代は近代での日光東照宮への出勤時の宮と田楽法師の交渉史であった。その理由は室町時代以降衰退の一途をたどっていたにもかかわらず、なぜのちの時代にまで、継承することが可能だったのか、という芸能継承の構造および、またその芸能を必要とするパトロン側の需要の変化に興味をもったからであった。

田楽躍りの場合、もとは天台系寺院の芸能から神事芸能でも演じられるようになり、さらに中世では貴族や武家の邸宅で行なう遊興的な芸能へと発展を遂げ、一時は猿楽と肩を並べるほどの芸能に成長していった。しかし、ライバルの猿楽が室町幕府から庇護を受けた以降は衰退の一途をたどる。中世から近世への過渡期での目立った出勤は、豊臣秀吉七回忌の豊国神社臨時祭礼やその後の日光や和歌祭等の東照宮祭礼くらいとなる。そのため芸自体の衰退が著しく春日、日吉、住吉などの大社への出勤を主とする神事

芸能への回帰をはかっていく。日光東照宮では江戸時代以降徳川家康の回忌ごとの大祭礼に恒例として幕末、そして大正4年[1915]の三百回御神忌祭まで出勤していた。

上記論文では近代に入り、徳川幕府が消滅することによって変容した日光東照宮の祭礼と、慣例によって出勤しようとする田楽法師との交渉史を、大正4年の三百回御神忌祭と、出勤のかなわなかった昭和40年[1965]の三百五十回御神忌祭を双方の史料から考察したものである。明治維新によって多くの芸能が継承の危機にさらされた。このことは明治維新に限らず、さまざまな時代の転換点でおこっている。明治から大正にかけての猿楽狂言方の鷲流の混乱および廃絶がその代表であり、同様の事態は茶の湯や武芸などでもおこっている。田楽躍りの衰退ははやく、すでに室町時代後期から起こっていたため、こうした転換期への順応が容易に出来たものと考えられる。

現在田楽法師が継承する田楽躍りは、奈良の春日若宮おん祭でみられる。また、熊野で室町時代に田楽躍りを伝習し、僧侶によって継承された田楽躍りは「那智の田楽」として地元那智山の方々によって継承されており、ユネスコ無形文化遺産にも登録されている。

コロナ禍により、全国のほとんどの祭礼が休止されている今、その場で演じられるはずであったさまざまな芸能も休止を余儀なくされている。ワクチンの普及によって、今後収束も考えられるが、これまでどおりの祭礼、ひいては世の中の仕組みがもとにもどることは考えにくい。この1年で急速にデジタル化が浸透し、社会自体が大きな転換点を迎えようとしている。こうした転換点においてこれまで連続と継承されてきたさまざまなものが変化することも考えられる。田楽躍りが

演じられている春日若宮おん祭も令和2年度はYouTubeによるライブ配信を行なった。コロナ収束後、こうした「伝統文化」として、これまでの社会を「表象」してきた祭礼および芸能の変化にさらに注視していく必要がある。



春日田楽(春日若宮おん祭)



那智の田楽(那智の扇祭)

## 助左衛門家五代記—高橋家と木ノ本村—

2020年11月17日(火)から12月18日(金)まで、特別展「助左衛門家五代記—高橋家と木ノ本村—」を開催しました。本展では、コロナウィルス感染拡大予防のため、入場制限等を設けつつも、多くの一般来場者がお越しくださり、無事に開催を終えることができました。なお公開後、すこしでも多くの方々に本展をご覧いただけるよう、展示室および展示品をスライドショーで公開しています。(和歌山大学公式YouTubeチャンネル)



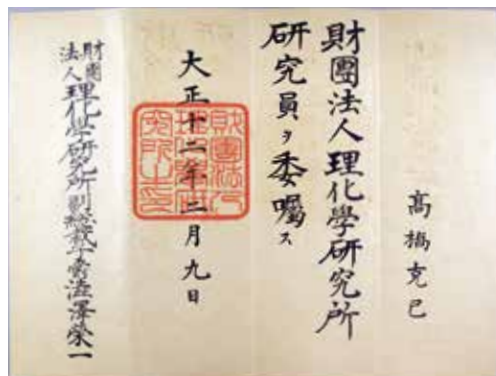
特別展動画はこちら

特別展では高橋家が庄屋を務めたこともある都市近郊農村である木ノ本村を絵図等で紹介しました。その上で第1章では江戸時代から明治時代にかけて地方名望家として明治時代には村会議員を務めた高橋助一郎、その長子であり村内外の大地主で、地主利益を勃興期産業や地元織布会社の起業に投資し、さらに朝鮮半島への資本投下、土地経営にも関与する地方の産業資本家の二郎を関係する資料で紹介し、そして青年期には哲学や美学、社会科学の書籍を多数購入し読書しているインテリ、文化人となった二郎の次男である潤二郎(高橋克己の弟)を取りあげ、自筆の絵画等を紹介しました。



高橋克己

第2章では昭和前期、ビタミンAの抽出に成功し、和歌山市の「偉人・先人」のひとりとして数えられる二郎の長男・克己の生涯を卒業証書や論文、そして家族との手紙や志半ばでの病没、没後の顕彰にいたるまでを高橋家が所蔵していた資料をとおしてたどりました。

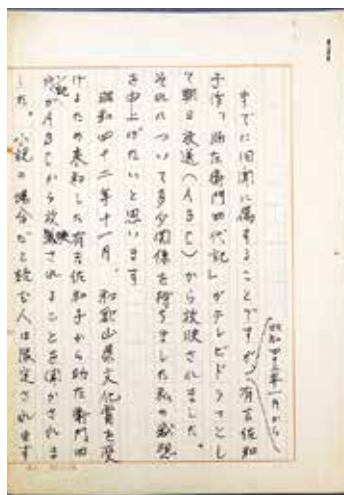


高橋克己理化学研究所研究員辞令

第3章では、郷土史家として『和歌山市史』編さん事業にも関与した克己の末弟・進が、江戸期から昭和期にかけて収集した木ノ本村の記録・文書を中心に公開しました。これらの古文書や古記録を使って、木ノ本村の歴史や高橋家の歴史をまとめた進の自筆稿本等を展示しました。また、この高橋家の江戸期の四代を小説にしたのが有吉佐和子の『助左衛門四代記』です。進と佐和子とのやりとり等がわかる葉書や同書が佐和子によって執筆される経緯を記した進による原稿等も展示しました。

高橋家の記録・文書等は1993年～96年に和歌山県立文書館が調査を行ない、約4,000点が同館へ寄託されています(『海部郡木本村高橋家文書目録』)。一方、以外の記録・記念物や書籍等(約2,600点)は2002年に本学教育学部日本史研究室藤本清二郎(研究所幹事(当時))が院生学生と調査をはじめ、目録を完成させ、2019年、同文書群が正式に進のご子息である浩爾氏より、寄贈を受けました。本展覧会はその成果報告展として行ない、戦前日本社会の科学・文化を担う人材がうまれた環境・背景等が鮮明にわかる展覧会となりました。

(吉村旭輝)



【左】高橋進宛有吉佐和子葉書、【右】高橋進「(助左衛門四代記と私)」原稿

## 泉州 岸和田の宗教文化—高僧伝と寺社縁起—

2021年1月21日(木)より2月22日(月)までの間、標記企画展を開催した。岸和田に特にゆかり深い四人の高僧たち一行基菩薩・役行者・燈誉上人・徳本上人に着目し、その生涯を物語る地域の文化財を読み解こうとしたものである。加えて、岸和田のシンボルとも言うべき『蛸地蔵縁起絵巻』、さらに残念ながら原本は散り散りになってしまっている『神於寺縁起絵巻』の精巧な近代模本をお借りし、詳しく紹介することで、岸和田の歴史・文化の一端を弊所展示室に復原する機会を頂戴した。関係各位に記して深謝申し上げたい。なお、その詳細については、企画展資料集(図録)と展示品目録附解説をご参照いただきたい。

紙幅が限られていることもあり、ここでは岸和田市稲葉町会蔵『極楽寺縁起』を糸口として、本展の一部を振り返ってみたい。なお、この「極楽寺」は岸和田市稲葉町、菅原神社境内に建つ麻福山大門坊極楽寺のこと。極楽寺町の極楽寺からは本展では『燈誉上人行状絵伝』をお借りして展示することができたが、こちらについては稿を改めようと思う。

さて、本書巻末の嘉永四年[1851]霜月五日奥書には、本文と同筆で「元亨釈書智光法師伝行基／伝智光曼荼羅縁起／袖中抄當院古記録等／皇都寺町和泉式部〈遺蹟〉／華嶽山東北寺誠心院住／静居自性謹誌」と見える。京都寺町(新京極通六角下がる)誠心院住職であった静居自性が奥書に見える諸書を参看して縁起本文を制作・書写して極楽寺に納めたものであることが知られる。ただし静居自性と極楽寺との関わりは現段階ではよく分からない。なお、この誠心院には、隣寺である誓願寺の『誓願寺縁起』および能「誓願寺」に依拠した『和泉式部縁起』(寛永二十年[1643]写、絵巻二卷二軸)が蔵されている(大橋清秀「和泉式部縁起について」『論究日本文学』11,1959)。

「この寺は人皇四十五代聖武天皇の御世神亀天平のころ智光法師の開基なり」と書き出す『極楽寺縁起』は、奥書に見られる諸書に加え『日本霊異記』『今昔物語集』『古本説話集』といった説話集、平安時代後期の歌学書などに見られる「真福田丸(麻福田丸とも)説話」「智光墮地獄説話」「智光曼荼羅感得説話」を机上で接合した智光伝を記すもので、極楽寺創建についても冒頭部分以上の言及がない。行基の前世であった少女が幼少時代の智光すなわち「真福田丸」を仏道の世界に導く善知識となったとする「真福田丸説話」については、恋慕が機縁となっているとする点、『奥義抄』以後の歌論書に類するという特徴があるものの、比較的簡略な内容にとどまる。

しかしながら、智光が「泉州稲葉村」の出身であるとする点は本書に特異である(諸書は河内国の出身とする)。これは智光と稲葉村との縁を言うための訛伝だろうが、享保十六年[1731]に刷られた「智光所感如来掌中示現曼荼羅」一幅が稲葉町会所蔵として伝存していることによって、岸和田・稲葉の地域史にとっての新たな意義が生じてくる。この曼荼羅は、近世に入って発見された異相本智光曼荼羅をもとにして享保十六年に開版された版本に着色を施したもの。版木は京都三条の檀王法林寺に蔵されている。縁起本文の末尾近くには「智光上人掌中示現の曼陀羅をは元興寺の後の住僧梓にあり又其を紙に摺或は彩色表装など清らにして當山は智光の誕生の所なりといひて贈られけるよし此寺の口碑に伝へぬ」とあり、「智光曼荼羅」を中心にすえた講が営まれていたことが本書によって知られるのである。両者は、地域史における意味を補い合うかたちで文化財として伝存し、そして今も地域社会の年々の営みの中で機能しているのである。

(大橋直義／日本中世文学・文献学)



# 紀州研2020年度展覧会報告



## 企画展

### 和歌祭—渡物と練物—

- 会期 / 2020年4月7日(火)～5月29日(金)
- 総入場者数  
0名(緊急事態宣言発出につき中止)
- 図録 / 無(2011年特別展図録を配布予定であった)
- 協力 / 紀州東照宮、和歌祭保存会



## 常設展

### 紀州地域の文化財 —館藏品・寄託品展—

(特集:和歌山県師範学校郷土室の世界)

- 会期 / 2020年6月25日(木)～7月31日(金)
- 総入場者数 / 16名(学内者のみ入室可能)
- 常設展動画視聴回数  
253回  
(2021年2月2日時点)
- 図録 / 無



## 常設展

### 紀州地域の文化財 —館藏品・寄託品展—

(特集:大庄屋文書からみる近世)

- 会期 / 2020年9月1日(火)～9月23日(金)
- 総入場者数 / 17名
- 図録 / 無

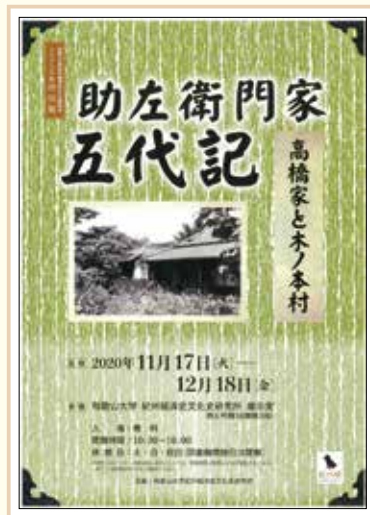


## 企画展

### 亜米利加へ、加奈陀へ

—遺物と記憶から振り返る移民と和歌山—

- 会期 / 2020年10月16日(金)～11月5日(木)
- 総入場者数 / 151名
- 企画展動画視聴回数 / 186回(2021年2月2日時点)
- 図録 / 無
- 共催  
太地町教育委員会、美浜町、那賀移民史懇話会、NPO法人日ノ岬・アメリカ村
- 後援  
公益財団法人和歌山県国際交流、わかやま南北アメリカ力協会



## 特別展

### 助左衛門家五代記 —高橋家と木ノ本村—

- 会期 / 2020年11月17日(火)～12月18日(金)
- 総入場者数 / 96名
- 特別展動画視聴回数 / 42回  
(2021年2月2日時点)
- 図録 / 有(全20頁)



## 企画展

### 泉州 岸和田の宗教文化 —高僧伝と寺社縁起—

- 会期 / 2021年1月21日(木)～2月22日(日)
- 総入場者数 / 119名
- 図録 / 有(全32頁)

information

2021年度  
企画展

和歌祭—渡物と練物—

会 期／2021年4月6日[火]～5月28日[金]  
 会 場／和歌山大学 紀州経済史文化史研究所  
 展示室(図書館3階)  
 入 場／無料  
 開館時間／10:30～16:00  
 休 館 日／土・日・祝日(図書館閉館日は閉館)



【左】獅子舞(1990年和歌祭)、【右】唐人(新装束)

紀州東照宮は徳川家康の十男であり、紀州徳川家初代にあたる徳川頼宣が父・家康を東照大権現として祀るために創建されました。頼宣は紀州藩主になる前は父・家康が亡くなった場所である駿府藩主であったことから、家康が死去した直後に久能山東照社の造営や久能山から日光山への家康の霊柩を遷す小祥祭にも深く関わっていました。そのことから頼宣は紀州藩入国後すぐに天海を招いて和歌の浦の地に東照社と天耀寺の造営、および祭式と法会を整えます。その際創始された和歌祭は紀州東照宮の例祭として1622年(元和8)の東照宮創建の翌年から創始されます。その際、東照大権現の神輿に付き

従う渡物だけでなく、全国の東照宮祭礼では初となる和歌山城下町民による練物も登場しました。

また2021年の和歌祭では和歌祭四百年式年大祭の関連事業として渡物である棒振り、獅子舞、童子が復興する予定です。また、和歌山大学でも2017年に復興しました練物の唐人の装束をさらに3着復元しました。本展では2022年の四百年式年大祭にむけて、これらの復元装束をはじめとして、渡物と練物を紹介し、現行のものだけでなく、時代の変遷とともに失われた渡物と練物もあわせて公開いたします。(主担当: 吉村旭輝)

2021年度 紀州経済史文化史研究所 展覧会予定

企画展

「和歌祭—渡物と練物—」

2021年4月6日[火]～5月28日[金]

常設展

「紀伊半島の文化遺産」

【第1期】2021年6月下旬から開催  
 【第2期】2022年1月上旬から開催

企画展

「吉田初三郎鳥観図からみる

和歌山観光名所(仮)」

2021年10月上旬から開催

特別展

「1969 若者たちの問い

—写真で見る全共闘の記録—」

2021年11月中旬から開催

ぜひ  
フォロワー  
をお願い  
します！



紀州研Twitter